

## 論文内容の要旨

報告番号	甲 第 4 号
論 文 名	<p style="text-align: center;">住居におけるコミュニケーション空間の計画に関する基礎的研究 — 高度経済成長終焉以降の都市の住生活変容に対応して —</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> <p style="text-align: center;">A FUNDAMENTAL STUDY ON THE PLANNING OF COMMUNICATION SPACE IN THE DWELLING HOUSE — In response to a change of urban dwelling life since the end of the high economic growth —</p> </div>
氏 名	江上 徹
<p>本研究は、高度経済成長終焉以降の時期の都市住居を対象に、この間の生活変容の下でその不全が強く意識されるようになってきた住居におけるコミュニケーションに焦点をあて、そのための空間の計画に関する基礎的検討を行うことを目的としたものである。</p> <p>論文は、序論、本論、結論の三部構成であり、本論部は更に多目的空間としての居間の計画を主題とした第Ⅰ部と、近年の情報社会化の下でのコミュニケーション空間のあり方を主題とした第Ⅱ部とに分かれている。序論は五つの章から成り、はじめの三章で研究の意義と視点、背景、目的と方法を論じ、続く二章で本研究に関連する既往研究のレビュー、本論文の構成の説明と特定用語の規定を行った。</p> <p>本論第Ⅰ部の第1章、第2章では各々集合住宅、戸建住宅を対象とした住み方調査及び、本研究の方法上の特徴であるモニター調査に基づいて、居間・リビングルームが「だんらん」という言葉では括りきれない多様な家族生活の場となっていること、しかし他方でそこが主たる接客の場でもあることを指摘し、その多目的な使われ方の実態を明らかにした。更に、そのような多目的空間としての居間を計画する上で配慮すべき諸点についての分析・考察を行った。第3章では現地での文献調査に基づいてイギリスの Living Room の起源・成立を調べ、それが本質的に多目的な空間として誕生したことを明らかにした。</p> <p>本論第Ⅱ部では、先ず第1章で複数の住み方調査に基づき、パソコン等の情報関連機器の住居への導入の実態とそれによる新たな家族間コミュニケーション生成の可能性を明らかにし、第2章では住宅雑誌を対象とした文献調査と住み方調査によって、家族共用の学習・情報空間＝ファミリー・スタディの必要性と可能性についての分析・考察を行った。</p> <p>結論では本研究の結果を、Living Room の本源的な多目的性、多目的空間としての居間の計画のあり方、ファミリー・スタディの必要性と可能性という三点にまとめた。</p>	